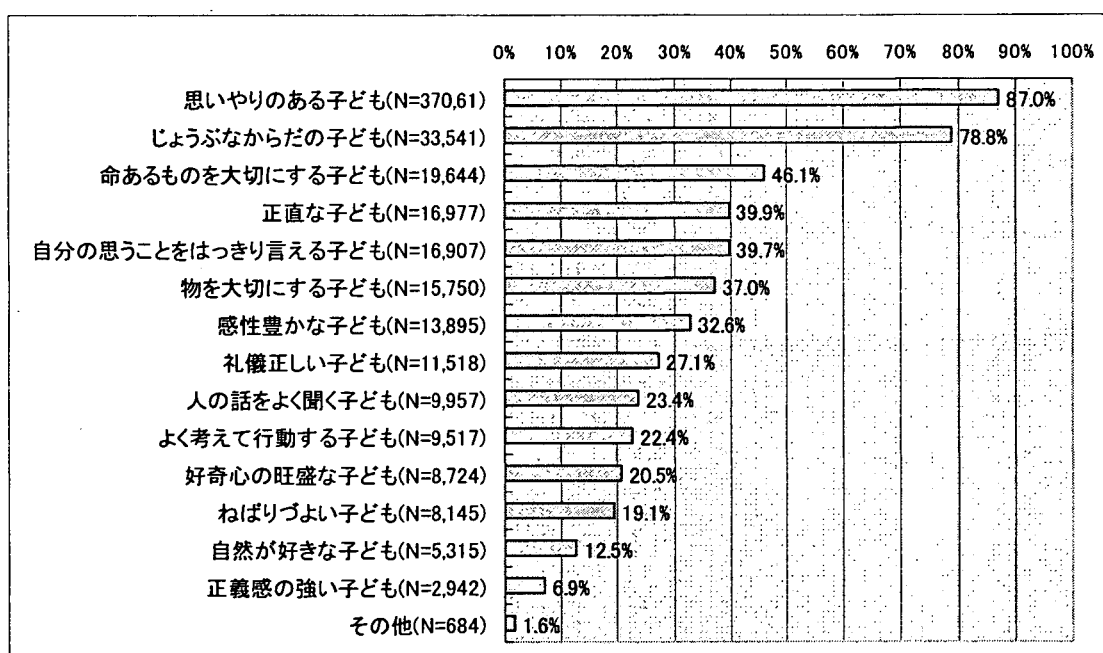


いもの5つまでを選んでその番号に○をつけてください」(問14)という設問がある(単純集計の結果を図1に掲載)。この設問の各子ども観をどのような家族が選択しているか、それが育児行動等とどう関係しているかを確認し、既存の子ども観研究の中に位置づけられないだろうか。というのは、仮に本縦断調査の経過とともに、家族の教育戦略や子ども自身の価値観や人生観を追跡調査することができれば、それらと出生児が2歳半の時点の子ども観の関係性を見ることで、「子ども」像が、どのような家族の戦略と結びついて、どのような形で「社会」に位置づくのか(位置づかないのか)を、パターン分けなどしながら追跡できるかもしれないと考えるからである。本稿は、そのための基礎的なデータの整理と既存研究との関係を探る作業を行いたい。

図1 第3回問14単純集計(多重回答)



以下では、まず、似たような設問項目を持つ「日本人の国民性調査」や青年や成人を対象とした大規模社会調査との比較を通じて、本調査項目の特徴と限界を明らかにする(2.)。具体的な分析を行う。次に、大まかな回答傾向を確認しながら、子育て家族の子ども観の情報をコレスポネンス分析によって4分類へと集約することを試みる(3.)。その上で、それらと家族の基本属性との関係を確認する(4.)。それによって、上述の分類と先に見た既存の子ども観研究との関係性をさぐり、「出生児調査」に基づいた子ども観研究の試みがある程度妥当なものであることを確認する。最後に、子ども観の分類を用いた育児行動の分析事例として、しつけの方法との関係性の分析を行う(5.)。

## 2. 出生児縦断調査の位置

「出生児調査」の第3回調査問14「どのような子に育てて欲しいと思いますか」は、図1にあげられた15項目の中から、当てはまるものを5つまで選択する設問である。その設問項目は、2歳半の幼児に対して保育者が願うような諸項目が多岐に渡って羅列されている。それは、子育て家庭の実感に近い言葉で尋ねられている分、包括的にそのリアリティを再現できる一方、項目設定がアドホックで体系立った分析がしにくいという欠点を持っているようにも思われる。

また、既存の調査との対応も希薄である。その中で設問や項目が比較的近いのが、1953年より5年ごとに実施されている、総務省統計局「日本人の国民性調査」（以下、国民性調査）の第10回（1998年）および第11回（2003年）の、子どもの将来像を尋ねた設問（「子供がいるとしたら、あなたは、将来、どのような性質を持つ大人になってほしいと思いますか。つぎの中から、特に重要と思うものを3つ選んでください」）である。本調査項目との差異は、大人になったときの理想を尋ねている点、3つまでの多重回答である点、子どもの年齢が統制されていない点である。

「国民性調査」（第11回）の項目および回答率<sup>1</sup>に、「出生児調査」の対応する項目および回答率を並べてみたのが表1である。多重回答であること、両調査とも累積%から判断する限りにおいて大半が選択可能な項目数の上限まで選択していることから、選択可能な項目数の上限の値で割った値も併記しておいた。それによると、似た項目に関しては、若干の変化はあるものの、似たような傾向が読み取れる。その点で、出生児調査の結果は妥当なものであり、一般的な傾向を表しているかと判断してよいだろう。対応していない項目を見ると、「国民性調査」では自立や公共心に関わる項目が多いのに対して、「出生児調査」では感性や協調性に関わる項目が多い。このような選択項目の設定の差異自体が、調査者が図りたい「大人」性と「子ども」性の差異を表しているようにも思われる。子ども向けの出生児調査にも自立や公共心に関わる項目を入れたらばどうなったであろうか。また、冒頭の広田（1999）の分類に戻れば、「童心主義」的な感性に関する項目や協調性や礼儀などの「厳格主義」的な項目に近いものはあるが、「学歴主義」的な項目はない。対象児が2歳半であったことを考えれば、そのような項目は尚早なのかもしれないが、例えば、知識欲や他の子に比べた早熟度などに関する項目などを入れておくことはできたかもしれない。時系列的な変化の分析を可能にするような項目設定や、他の調査との対応関係のあるものにすれば、データの利用に幅が出たように思われる。

同様に、人々の生き方の質や社会との関係性意識について聞いた伝統的な調査に、NHK放送文化研究所が1973年から5年ごとに行っている「日本人の意識調査」（1973～5年ごとに実施）の「生活目標」に関する項目がある。そこでは、感性志向か理性志向か、自己中心か社会中心かの2軸を組み合わせることで、「その日その日を、自由に楽しく過ごす」（快

<sup>1</sup> [http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/data/html/ss4/4\\_16\\_all.htm](http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/data/html/ss4/4_16_all.htm)（統計数理研究所、国民性調査、単純集計表、#4.16 子供の将来の性質、2007年10月27日アクセス）

志向＝感性×自己)、「しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く」(利志向＝理性×自己)、「身近な人たちと、なごやかな毎を送る」(愛志向＝感性×社会)、「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」(正志向＝理性×社会)の4項目を尋ねている。周知のことながら、この調査項目には分析事例が蓄積されているし<sup>2</sup>、似た設問項目を用いた調査もしばしば行われている。例えば、内閣府が1970年から1990年にかけて5年ごとに行っている「青少年の連帯感調査」と、その後継調査とも言うべき1997年、2002年の「青少年の生活と意識に関する基本調査」には「人生目標」を、「その日、その日を楽しく生きたい」、「身近な人との愛情を大事にしていきたい」、「自分の趣味を大切にしていきたい」、「経済的に豊かになりたい」、「社会や他の人々のためにつくしたい」、「良い業績をあげて、地位や高い評価を得たい」という項目で尋ねている。これらを子ども用に修正したような項目を聞くことで、親世代の自らの生活に関する意識と子ども観の関係性などへと分析や、子どもの加齢に応じた期待の変化の分析などへと展開ができたのではないだろうか。

とはいえ、あえてないものねだりを書いたが、すでに調査済みの第3回調査の分析からも、多くのことを言えるように思われる。そこで、以下では、これらの既存の調査や家族と子ども観に関する先行研究との関係性も視野に入れつつ、当該設問の回答結果の分析を行う。

表1 「国民性調査」と「出生児調査」の項目比較

国民性調査の設問	%	/3	出生児調査での対応項目	%	/5
1 礼儀正しさ	40%	13.3%	礼儀正しい子ども	27.1%	5.4%
2 規則を守り、人に迷惑をかけない公共心	59%	19.7%			
3 公正さや正義感	16%	5.3%	正義感の強い子ども	6.9%	1.4%
4 他人のことを思いやる心	68%	22.7%	思いやりのある子ども	87.0%	17.4%
5 落ち着きや情緒の安定	10%	3.3%			
6 責任感	46%	15.3%			
7 人前で自分の意見をはっきり言う力	27%	9.0%	自分の思うことをはっきり言える子ども	39.7%	7.9%
8 自分で物事を計画し実行する力	24%	8.0%	よく考えて行動する子ども	22.4%	4.5%
9 特になし	0%	0.0%			
10 その他【記入】	3%	1.0%			
DK	0%	0.0%			
計	293%	97.7%			

### 3. 子ども観の分類の試み

#### 3.1 基本的な回答傾向

当該設問の単純集計は、図1にすでに示したとおりである。この設問は「特に重視したいもの5つまでを選」ぶという条件が付されている。回答の累積パーセントが、494.6%であることから、大半の回答者が上限の5つまで回答したことになる。ただし、6つ以上に○をしたケースもあり、その場合はそのまま集計されている。

<sup>2</sup> 古典的なものでは、見田(1975→1984)など。

「思いやりのある子ども」が87.0%、「じょうぶなからだの子ども」が78.8%と、健康でやさしい子どもになることを、大半の親が選択していることがうかがわれる。それ以外のもののうち（仮に上記2つ以外が均等に選ばれたと仮定した場合の $100/3=33.3\%$ を基準にすると）答えが多いのは、「命あるものを大切にする子ども」(46.1%)、「物を大切にする子ども」(37.0%)、「感性豊かな子ども」(32.6%)といった自然や環境への感受性や、「正直な子ども」(39.9%)、「自分の思うことをはっきり言える子ども」(39.7%)など素直な自己表出に関わる項目の選択率が高い。これらは、私たちが通常考える子どもらしさを、比較的場面が限定されない形で表現している項目であろう。「好奇心」や「正義感」、「ねばりづよさ」など、より限定された性格づけをするような項目は選ばれにくいようである。

次に、設問間の相関係数を見たのが、表2である。設問数が多いため値が0.1以下のものが大半を占めるので、値が0.1を超えるものを太字にして示した。大半が負の相関を示しているのは、選択可能数が限定されていることに起因すると考えられる。つまり、負の相関は、相反する志向性の表れとも似た設問を重複して選ぶのを避けたことの表れとも読み取れ、判断が難しいのである。ただし、値がわずかでも正であったものには一定の傾向が読み取れる。例えば、「思いやりのある子ども」×「正直な子ども」、「思いやりのある子ども×命を大切にする子ども」といった多数派同士の組み合わせのほか、「自分の思うことをはっきり言える子ども」×「好奇心の旺盛な子ども」のような自発性を重視する発想、「感性豊かな子ども」×「自然が好きな子ども」、「感性豊かな子ども×好奇心の旺盛な子ども」、「自然が好き×好奇心の旺盛な子ども」といった童心とも呼べるような自然や感性を志向する発想などである。

このように、5つまでの多重回答という設問の制約からくる問題がやや見られるが、何らかの回答の傾向は見られると考えられる。

表 2 第 3 回問 14 相関係数

	よく考え て行動す る子ども	しようぶ なからだ の子ども	正義感 の強い子 ども	思いやり のある子 ども	礼儀正し い子ども	正直な子 ども	自分の 思うこと をはつき り言える	感性豊 かな子ども	物を大切 にする子 ども	人の話を よく聞く 子ども	ねばりつ よい子ども	命あるも のを大切 にする子 ども	自然が 好きな子 ども	好奇心 の旺盛な 子ども	その他
よく考えて行動する子ども	1	-.132(**)	-.014(**)	-.107(**)	-.058(**)	-.121(**)	-.010(*)	-.070(**)	-.081(**)	.046(**)	0.01	-.090(**)	-.066(**)	-.067(**)	-.016(**)
しようぶなからだの子ども		1	-.053(**)	0.01	-.067(**)	-.036(**)	-.077(**)	-.057(**)	-.071(**)	-.113(**)	-.022(**)	-.036(**)	-.014(**)	-.036(**)	-.019(**)
正義感の強い子ども			1	-.031(**)	0.00	-.011(*)	-.043(**)	-.049(**)	-.068(**)	-.054(**)	-.010(*)	-.001	-.021(**)	-.022(**)	-.010(*)
思いやりのある子ども				1	-.019(**)	.050(**)	-.095(**)	-.019(**)	0.00	-.057(**)	-.050(**)	.017(**)	-.077(**)	-.097(**)	-.041(**)
礼儀正しい子ども					1	-.046(**)	-.100(**)	-.123(**)	-.001	-.001	-.073(**)	-.120(**)	-.066(**)	-.098(**)	-.021(**)
正直な子ども						1	-.146(**)	-.127(**)	-.028(**)	-.048(**)	-.081(**)	-.073(**)	-.073(**)	-.104(**)	-.044(**)
自分の思うことをはつきり言える子ども							1	-.106(**)	-.132(**)	-.013(**)	-.011(*)	-.106(**)	-.068(**)	-.024(**)	-.026(**)
感性豊かな子ども								1	-.136(**)	-.119(**)	-.053(**)	-.068(**)	.020(**)	.082(**)	-.016(**)
物を大切に する子ども									1	-.032(**)	-.124(**)	0.00	-.040(**)	-.144(**)	-.041(**)
人の話をよく 聞く子ども										1	-.065(**)	-.104(**)	-.057(**)	-.107(**)	-.022(**)
ねばりつよい 子ども											1	-.120(**)	-.050(**)	-.021(**)	0.00
命あるものを 大切に する子ども												1	-.016(**)	-.132(**)	-.033(**)
自然が好きな 子ども													1	.024(**)	-.012(*)
好奇心の旺盛 な子ども														1	-.013(**)
その他															1

\*\* 1% 水準で有意 (両側) です。

\* 5% 水準で有意 (両側)

※ -.1以下で有意のものを太字に、+で有意のものを細掛けを施した

### 3.2 コレスポネンス分析

各項目ごとの家族の基本属性による分布などは、厚生労働省官房統計情報部（2005）にクロス表集計値が掲載されているため、次に本稿では、以上のような回答傾向をよりわかりやすく示し、1.で見た家族研究の子ども観分析の系譜に位置づけることを試みるために、コレスポネンス分析を行う<sup>3</sup>。当該設問の SPSS Categories15.0 を用いた多重コレスポネンス分析<sup>4</sup>の結果が図3および表3、4である。

イナーシャ（寄与率）が低いものの<sup>5</sup>、2次元まで析出した結果、一定の傾向は読み取れる。図2および表4より<sup>6</sup>、第一次元は、「物を大切に子ども（該当）」、「正直な子ども（該当）」、「礼儀正しい子ども（該当）」、「命を大切に子ども（該当）」など、他者や環境に従順で協調性のある子ども像を示すものが高得点であり（逆に、「自分の思うことをはっきり言える子ども（非該当）」、「好奇心が旺盛な子ども（非該当）」などの積極的で自発的な子ども像を否定する発想も上位に来ている）、「好奇心が旺盛な子ども（該当）」、「ねばりづよい子ども（該当）」、「感性豊かな子ども（該当）」、「自分の思うことをはっきり言える子ども（該当）」、「よく考えて行動する子ども（該当）」などの、積極的で自発的な子ども像が高い負の得点を示している（「思いやりのある子ども（非該当）」も負に高得点）。ここから、第一次元は、積極的・自発的か調整的・協調的かという子ども観の差異を表すもののように思われる。

また、第二次元は、「人の話をよく聞く子ども（該当）」、「よく考えて行動する子ども（該当）」、「礼儀正しい子ども（該当）」、「自分の思うことをはっきり言える子ども（該当）」などの得点が正に高く（「じょうぶなからだの子ども（非該当）」、「思いやりある子ども（非

<sup>3</sup> コレスポネンス分析（対応分析）は、各ケースおよび各変数の等質性を視覚化する分析手法である。日本語で手に入る解説としては、大隈・馬場ほか（1994）などがある。分析には、SPSS Categories 15.0 を用いた。SPSS の使用方法については、内田（2006）等を参考にした。

<sup>4</sup> 本設問のような多重回答データ（01 データ）の場合、SPSS Categories 15.0 によって分析するには 2 種類の方法がありえる。1 つは、01 データを下表のようなデータ形式に置き換え、コレスポネンス分析を行う方法である。この方法は、しかしながら、今回のようなケース数が万単位の大規模調査では、容易には適用しがたい。もう 1 つは、該当=1/非該当=2 と数値を置き換え、項目を選択したという情報と選択していないという情報を等価のものと扱い、多重コレスポネンス分析を適用する方法である。今回のような場合、3.1 で見たように、5 つまでという条件に回答行動が制約されている部分が多いと考えられ、該当と非該当を同等のものと扱えるかには大幅な留保が必要である。しかしながら、上記のよう前者の方法は現実的に取りがたいことから、今回は後者の方法を用いることとした。なお、実際の分析は【[分析] → [データの分解] → [最適尺度法]】を使用した。

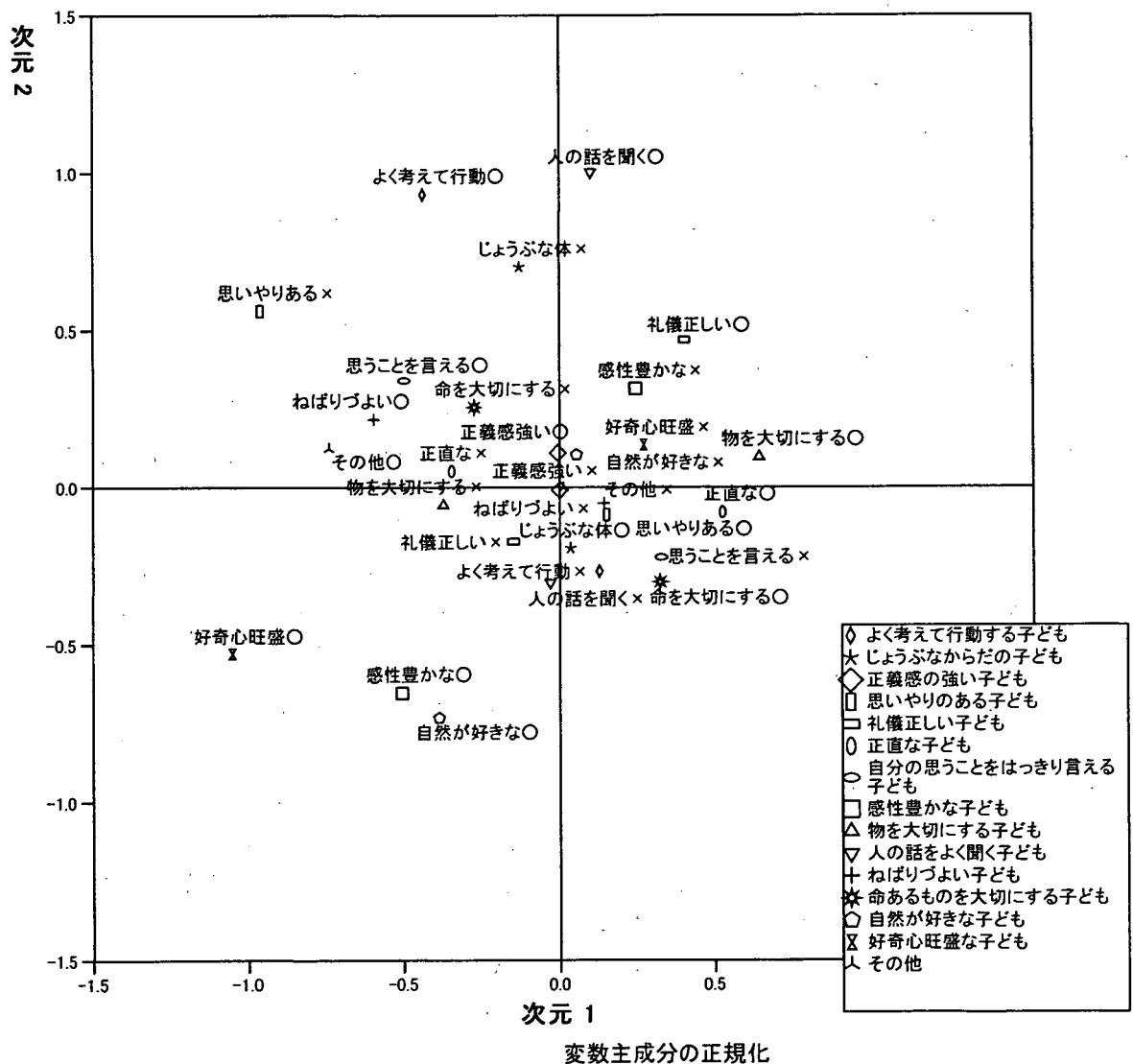
ケース (回答者)	選択肢
1111	1
1111	3
1111	4
1112	2
1112	3
⋮	⋮

<sup>5</sup> 二値データであるため、一般にイナーシャは高くなりにくい。

<sup>6</sup> 図中で距離に近いものが似た傾向を持っていることになる。また、原点の周囲には特徴がないものがある。

該当)、「感性豊かな子ども (非該当)」も高い、「自然が好きな子ども (該当)」、「感性豊かな子ども (該当)」、「好奇心が旺盛な子ども (該当)」、「命を大切にする子ども (該当)」の得点が負に高い(「人の話を聞く (非該当)」も同様)。前者は判断力や思考力など知的な活動に関係する項目、後者は感性や体に関係する項目と考えられ、第二次元は知性か感性かという子ども観の差異を表していると言っよいのではないだろうか。

図2 第3回問14の多重コレスポネンス分析(カテゴリーの布置図)



※図中の表記は略したもの。各項目○=該当/×=非該当を示す。

表3 第3回問14の多重コレスポネンス分析（固有値とイナーシャ）

次元	Cronbach のアルファ	説明された分散		
		合計（固有値）	イナーシャ	分散の%
1	.334	1.454	.097	9.691
2	.275	1.345	.090	8.966
総計		2.799	.187	
平均値	.306 <sup>a</sup>	1.399	.093	9.328

a. Cronbach のアルファ平均値は、固有値平均値に基づいていません。

表4 第3回問14の多重コレスポネンス分析（数量化得点）

一次元		二次元	
物を大切にする○	0.640	人の話を聞く○	1.002
正直な○	0.526	よく考えて行動○	0.932
礼儀正しい○	0.402	じょうぶな体×	0.701
思うことを言える×	0.325	思いやりある×	0.561
命を大切にする○	0.321	礼儀正しい○	0.468
好奇心旺盛×	0.269	思うことを言える○	0.341
感性豊かな×	0.243	感性豊かな×	0.314
思いやりある○	0.149	命を大切にする×	0.255
ねばりづよい×	0.141	ねばりづよい○	0.217
よく考えて行動×	0.125	好奇心旺盛×	0.135
人の話を聞く○	0.101	その他○	0.124
自然が好きな×	0.055	正義感強い○	0.110
じょうぶな体○	0.035	自然が好きな×	0.104
その他×	0.012	物を大切にする○	0.097
正義感強い×	0.000	正直な×	0.052
正義感強い○	-0.006	その他×	-0.002
人の話を聞く×	-0.031	正義感強い×	-0.008
じょうぶな体×	-0.128	ねばりづよい×	-0.051
礼儀正しい×	-0.148	物を大切にする×	-0.056
命を大切にする×	-0.272	正直な○	-0.079
正直な×	-0.345	思いやりある○	-0.087
物を大切にする×	-0.373	礼儀正しい×	-0.172
自然が好きな○	-0.387	じょうぶな体○	-0.194
よく考えて行動○	-0.438	思うことを言える×	-0.222
思うことを言える○	-0.497	よく考えて行動×	-0.266
感性豊かな○	-0.505	命を大切にする○	-0.301
ねばりづよい○	-0.599	人の話を聞く×	-0.304
その他○	-0.741	好奇心旺盛○	-0.528
思いやりある×	-0.961	感性豊かな○	-0.654
好奇心旺盛○	-1.050	自然が好きな○	-0.733

※表中の表記は略したもの。各項目○=該当/×=非該当を示す。



したがって、以上の分析から、「平成 13 年 1 月 / 7 月生まれのお子さんはどのような子に育って欲しいと思いますか」という設問に基づいて、出生児調査の各ケースを積極的か調整的か、知性重視か感性重視かの 2 軸を交差させ、4 つの子ども観に分類できることになる。前者は児童中心主義と伝統的子ども観、後者は厳格（学歴）主義と童心主義とある程度重なっている部分もあると考えられ、1. で概観したような既存の子ども観研究との接続も可能となるように思われる。

表 5 は、各ケースを数量化得点に従ってこの 4 象限に分類したときの度数分布表である。以下では、既存の家族における子ども観の研究との関連性を見る目的も含め、この 4 分類と各ケースの属性の関係を探っていききたい。

**表 5 子ども観の 4 分類（度数分布表）**

	度数	パーセント
知性×調整	11377	26.6
知性×積極	9681	22.6
感性×積極	10789	25.2
感性×調整	10962	25.6
合計	42809	100.0

## 4. 子ども観 4 分類の規定要因

### 4.1 クロス表分析

まず、3. で提示した 4 分類と各ケースの子ども自身や家族に関する基本的情報とのクロス表分析および平均の差の分散分析を行った（表 6、7）。子どもの性別、きょうだい（多胎児含む）、子どもの成長状況といったその子どもの状態に関する項目、回答者の子どもとの続柄がケースによって異なるといった出生児調査特有の事情を考慮して回答者が誰か、父母の世代の問題を考慮して父母の年齢、先行研究で検討されていない外国籍の親の問題を見るために父母の国籍といった変数を検討した。加えて、1. で見たように、先行研究では都市中間層、専業主婦とサラリーマンの世帯（ときに核家族）といった要因が子ども観を規定するものとしてあげられていることから、都市規模、居住形態、祖父母との同居や行き来、父母の職業、収入、年齢といった項目を見た。

まず、表 6 のクロス表を見てみよう。まず、父母の国籍を除けば、子どもや家族の属性によって大きく回答傾向が変わるということはないということが重要である。これはつまり、子ども観とその持ち主が比較的均等に全国の各家庭に広がり共有されているということである。しかしながら、同時に、一定の傾向は読み取れる。それを見るために、残差の符号と絶対値——すなわち、全体的な傾向から逸脱した目立った傾向——に注目して見ていきたい。（表中では残差の絶対値が 1.97 を超えるものを太字にしてある。）

最初に子どもの性別を見ると、男の子にはより積極性を望みやすく、女の子には調整的態度を望みやすいという傾向が明らかに見て取れる。さらに、回答者が父親の場合は積極的な子どもを望みやすく、母親の場合には調整的態度を望みやすいということも確認できる（ただし、父親のみが回答したケースは全体の6.1%にすぎない）。子ども観そのものが、二重の意味でジェンダーに規定されていることが確認できて興味深い。

きょうだいを見ると、多胎児の場合は、3つ子になると身の回りのものを素直に大切にすする心性を表す「感性×調整」となる率が高くなる。兄弟がいる場合（第1回調査時点で他のきょうだいがいる場合）は「知性」をより選択しやすく、いない場合は「感性」を選択しやすくなり、当該設問のある第3回調査時までに弟妹がいる場合（厳密には、第1回から第3回できょうだい数が増えている場合を「弟妹あり」と見なした）は「感性×調整」の回答率が上がる。すなわち、きょうだいの順位ないしは他のきょうだいがいるという事実そのものによって、保育者が期待する子ども観に差異があるということだろうか。もしかすると、他のきょうだいの年齢によって、対象となっている子どもに対する思いも代わってくるということかもしれない。つまり、兄弟がいる場合は、より知性が要求される年齢であるため、それに影響された回答をするという可能性がありうる。

祖父母との関係性を見ると、第3回調査時にいずれかの祖父母と同居している場合は「知性×調整」という子ども観を持ちやすく、「感性×積極」を持ちにくい。同居していない場合はその逆である。第2回調査で祖父母との行き来を尋ねているが、そこではおおまかに、行き来が頻繁であるほど調整を志向する率が上がり、行き来が少ないほど積極性を志向する率が上がるという傾向が確認できる。祖父母との関係性が密であるほど、伝統的な子ども観（調整型）、さらには規律を要求する子ども観（知性×調整）を持ちがちになるということが確認できる。

都市規模（市郡コード）を見ると13都市では「感性×積極」の率が高くなり「知性×調整」が低くなる、郡部ではその逆である。また、住居形態では、一戸建ては郡部と同様の傾向、集合住宅は13都市と同様の傾向が見られるが、郡部には一戸建てが多く、13都市には集合住宅が多いという事情が関係していると考えられる。いずれにしても、一般に保守的な土地柄と推測される郡部で「知性×調整」が増加し、都市部で「感性×積極」が増加するという傾向は、祖父母との関係性とも共通するところがある。

父母の属性に視点を移せば、まず、父母の国籍によってかなり子ども観に違いが見られる。興味深いのは、中国籍の場合の「知性×積極」の高さなどである。しかしながら、父母の国籍が日本でないケースの全体に占める割合は、第1回調査時点で父1.1%、母1.6%と非常に少ない。

父母の就労状況別に見てみる。第3回での当該項目への回答に影響を与えようと考えられる第3回調査時以前の就労状況を確認した。まず、父親の就業状況に関しては、出産1年前および第1回調査では有意でなく、第2回調査は5%水準で有意ながらも、常勤で「知性×積極」が多い以外は、残差もわずかで大きな差異が見られなかったため、表6からは割

愛した。母親の職業に関しては、出産1年前、第1回調査時、第2回調査時とも、主婦層で「感性×調整」が選ばれやすく「積極」性は選ばれにくい、常勤層では「感性×積極」が選ばれやすく「調整」が選ばれにくいなどの傾向が見受けられる。戦前期の研究などでは都市中間層のサラリーマン・専業主婦家庭が童心主義の担い手であったと指摘されることが少なくないが、現代では女性が働くことも多いため、童心主義的な「感性」重視を共有し、主婦層が「調整」志向、常勤層が「積極」志向と分化しているのであろう。

第3回調査では、就業状況ではなく職種を聞いているが、父親の職種では、専門・技術職や管理職などの上位層で「積極」志向が見られ、逆に、運輸・通信職や生産工程・労務職などでは「知性×調整」を選びやすく「積極」性を選びにくいという傾向が見られた。また、販売職やサービス職では「知性×積極」の選択率が低い。全体としては、職業威信の高い職種の父親ほど「積極」性を好みやすく、職業威信の低い父親ほど「積極」性を好みにくいという傾向が見てとれる。母親の職種では、このようなわかりやすい傾向は見られないが、それでも、(詳細は表6を参照いただきたいが) 専門・技術職では「積極」志向が高めで「調整」志向が低め、「生産工程・労務職」では「知性×調整」の選択率が高めなど、男性と同等の傾向が見られる。

父母の年齢(第1回時の情報を元に、第3回時点のものを算出<sup>7)</sup>)では、父親では40歳ごろに転換点が見られる。30代前半には、「感性×調整」が選ばれやすく、「知性×積極」が選ばれにくい、40代を境に、「知性×積極」の率が上がり「調整」志向が低めとなる。母親の場合、30代後半で似たような転換が見られる。20代や40代後半はそれとはまた異なった傾向が見られるが、これらはケースが少ないということには留意が必要である。

父母の学歴を見ると、父母ともケースの少ない中卒、中卒後の専修・専門学校を除くと、高卒か高等教育卒かに明らかな差異がある。すなわち、ともに、高卒では「調整」志向が高くなりやすく、高等教育卒では「積極」志向が高くなりやすい。

次に、表7の平均の差の分散分析を見てみよう。子どもの成長状況(身長体重)と父母の就労収入と子ども観の4分類の関係を見たのが、表6の分散分析である。成長状況に関しては、「感性×調整」に比べて「知性×積極」ないし「感性×積極」を選んでいるほうが子どもの平均身長が高く、「感性×調整」に比べて「知性×積極」を選んでいるほうが子どもの平均体重が重い。すなわち、同年齢の子どもに比べて成長が早い子どもの親ほど、「積極」志向、中でも「知性×積極」志向となりやすいと考えられる。

また、夫婦の就労収入においては、収入が高いほうが「積極」を選びやすく、収入が低いと「調整」を選びやすいという関係性が読み取れる。(「知性×積極」と「感性×積極」の間、「知性×調整」と「感性×調整」の間には差異は見られない。)

<sup>7</sup> ただし、その間に離再婚があったケースはここでは問えない。

表6 子ども観の4分類と回答者の属性(クロス表)

		子ども観			
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整
性別別の	男	25.1%	23.7%	26.3%	24.9%***
	女	28.1%	21.5%	24.0%	26.4%
第3回回答者の組合せ	母のみ回答	26.7%	22.3%	25.1%	25.9%***
	父のみ回答	23.2%	26.2%	28.3%	22.2%
	父母のみ回答	26.9%	22.6%	25.3%	25.3%
	その他	36.2%	30.6%	16.2%	17.0%
	不詳	29.9%	26.6%	19.5%	24.0%
	単・多胎の別	単胎	26.6%	22.6%	25.2%
兄弟の有無	兄弟なし	23.9%	21.6%	27.7%	26.8%***
	兄弟あり	29.2%	23.7%	22.8%	24.4%
	兄弟なし	26.7%	22.8%	25.2%	25.3%*
姉妹の有無	姉妹あり	25.9%	22.0%	25.2%	26.9%
	姉妹なし	26.0%	22.7%	25.7%	25.6%***
同居の別	同居なし	26.0%	22.7%	25.7%	25.6%***
	同居あり	28.4%	22.5%	23.6%	25.5%
祖父母との行き来	両方の祖父母と同居	35.3%	11.8%	11.8%	41.2%***
	母方の祖父母と同居	27.3%	24.0%	24.0%	24.8%
	父方の祖父母と同居	28.6%	22.6%	23.4%	25.3%
	両方の祖父母とほとんど毎日・週に2	27.5%	19.8%	24.2%	28.4%
	母方の祖父母とほとんど毎日・週に2	27.5%	21.0%	24.4%	27.1%
	父方の祖父母とほとんど毎日・週に2	26.5%	21.6%	26.2%	25.7%
	両方の祖父母と月に1~3回	25.2%	21.1%	27.0%	26.7%
	母方の祖父母と月に1~3回	25.5%	23.5%	25.6%	25.5%
	父方の祖父母と月に1~3回	24.6%	25.7%	25.9%	23.7%
	両方の祖父母と数回	23.9%	24.4%	27.4%	24.4%
	母方の祖父母と数回	27.7%	26.7%	24.7%	20.9%
	父方の祖父母と数回	27.1%	25.5%	23.1%	24.3%
	行き来しなかった・いない・不詳	29.7%	24.4%	24.3%	21.6%
	全部不詳	25.8%	26.8%	24.8%	22.5%

		子ども観				
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整	
市郡コード	13大都市	25.0%	23.2%	26.6%	25.3%***	
	その他の市	26.7%	22.5%	25.1%	25.8%	
	郡部	28.2%	22.3%	24.0%	25.5%	
第3回	外国	19.1%	32.4%	26.5%	22.1%	
	不詳	27.8%	27.8%	24.4%	20.0%	
住居形態	一戸建て	27.5%	22.5%	24.3%	25.6%***	
	集合住宅(アパート・マンション)	25.5%	22.6%	26.1%	25.7%	
	不詳	27.8%	27.8%	24.4%	20.0%	
父の国籍	日本	26.6%	22.5%	25.2%	25.7%***	
	韓国・朝鮮	25.8%	22.6%	28.9%	22.6%	
	中国	16.0%	60.0%	12.0%	12.0%	
	フィリピン	0.0%	50.0%	25.0%	25.0%	
	タイ	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	
	米国	17.6%	41.2%	26.5%	14.7%	
	英国	40.0%	0.0%	60.0%	0.0%	
	ブラジル	12.5%	37.5%	25.0%	25.0%	
	ペルー	0.0%	57.1%	28.6%	14.3%	
	その他の国	20.0%	32.3%	30.8%	16.9%	
	母の国籍	日本	26.5%	22.5%	25.3%	25.7%***
		韓国・朝鮮	28.6%	22.9%	28.0%	20.6%
		中国	24.3%	48.1%	17.3%	10.3%
		フィリピン	39.2%	24.0%	17.6%	19.2%
タイ		29.2%	29.2%	4.2%	37.5%	
米国		33.3%	16.7%	33.3%	16.7%	
英国		0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	
ブラジル		20.0%	40.0%	20.0%	20.0%	
ペルー		33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	
その他の国		14.7%	44.1%	23.5%	17.6%	

※ \*はχ2乗検定の結果。\*\*\*<0.001 \*\*<0.01 \*<0.05

※ 下段は残差。残差が|1.97|を超えるものを太字とした。

表6 子ども観の4分類と回答者の属性(クロス表)(続き)

		子ども観				
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整	
出産1年前の母の就労状況	無職	28.2%	23.0%	23.7%	25.1%	***
		6.9	1.8	-6.4	-2.3	
	学生	22.6%	26.3%	28.5%	22.6%	
		-1.9	1.9	1.6	-1.5	
	勤め(常勤)	24.2%	22.2%	27.3%	26.3%	
		-7.6	-1.4	6.9	2.2	
	勤め(パート・アルバイト)	26.8%	21.7%	25.0%	26.5%	
		0.4	-2.1	-0.3	1.9	
	自営業・家業	26.8%	24.0%	25.1%	24.0%	
	0.2	1.5	-0.1	-1.6		
内職	30.7%	23.9%	22.6%	22.8%		
	1.9	0.6	-1.2	-1.3		
その他	20.1%	26.1%	26.1%	27.7%		
	-2.0	1.1	0.3	0.7		
不詳	28.3%	21.3%	25.8%	24.7%		
	0.7	-0.6	0.2	-0.4		
第1回の母の就労状況	仕事をさがしてる	28.4%	23.8%	24.0%	23.8%	***
		2.7	1.8	-1.7	-2.7	
	探していない	26.8%	22.1%	24.9%	26.2%	
		1.3	-3.2	-2.2	3.9	
	学生	18.2%	30.7%	33.0%	18.2%	
		-1.8	1.8	1.7	-1.6	
	勤め(常勤)	24.0%	23.0%	28.0%	25.0%	
		-5.1	0.8	5.7	-1.3	
	勤め(パート・アルバイト)	29.4%	23.4%	23.6%	23.5%	
		2.7	0.8	-1.5	-2.0	
自営業・課業	26.5%	23.7%	25.2%	24.5%		
	-0.1	1.2	0.0	-1.1		
内職	28.9%	25.1%	18.9%	27.1%		
	1.1	1.2	-3.1	0.7		
その他	20.5%	34.8%	25.0%	19.6%		
	-1.4	3.1	0.0	-1.4		
不詳	26.9%	22.3%	24.5%	26.3%		
	0.2	-0.1	-0.3	0.3		
第2回の母の就業状況	家事(専業)	26.6%	22.0%	25.0%	26.4%	***
		0.5	-3.7	-1.5	4.5	
	無職	26.9%	23.6%	24.2%	25.3%	
		0.4	1.1	-1.0	-0.4	
	学生	12.2%	29.7%	40.5%	17.6%	
		-2.8	1.5	3.0	-1.6	
	勤め(常勤)	24.5%	23.2%	27.9%	24.4%	
		-3.8	1.4	5.2	-2.7	
	勤め(パート・アルバイト)	28.9%	24.0%	23.3%	23.9%	
		3.6	2.2	-3.0	-2.8	
自営業・家業	26.0%	23.5%	25.4%	25.1%		
	-0.5	1.0	0.2	-0.6		
内職	29.4%	20.9%	21.8%	27.9%		
	1.6	-1.0	-1.9	1.2		
その他	28.1%	23.1%	31.4%	17.4%		
	0.4	0.2	1.6	-2.1		
不詳	26.7%	30.0%	23.1%	20.2%		
	0.1	2.8	-0.8	-2.0		

		子ども観				
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整	
父の職業 第3回	無職(家事専業、失業中を含む)	29.0%	25.4%	22.8%	22.8%	***
		1.2	1.5	-1.2	-1.4	
	学生	26.7%	24.4%	28.9%	20.0%	
		0.0	0.3	0.6	-0.9	
	専門・技術職	24.6%	23.4%	27.5%	24.4%	
		-5.6	2.4	6.8	-3.4	
	管理職	24.6%	24.3%	25.1%	26.1%	
		-2.6	2.3	-0.2	0.6	
	事務職	23.7%	23.5%	26.5%	26.2%	
		-4.8	1.7	2.2	1.1	
	販売職	26.2%	21.1%	26.1%	26.6%	
		-0.6	-2.9	1.6	1.9	
	サービス職	27.8%	20.8%	24.5%	26.9%	
	1.5	-2.4	-0.9	1.6		
保安職	29.3%	22.3%	22.2%	26.2%		
	2.0	-0.3	-2.3	0.4		
農林漁業職	25.1%	24.2%	25.8%	25.0%		
	-0.8	0.9	0.3	-0.4		
運輸・通信職	30.6%	21.4%	21.9%	26.1%		
	4.5	-1.4	-3.8	0.5		
生産工程・労務職	29.6%	21.2%	22.9%	26.3%		
	6.7	-3.3	-5.1	1.5		
その他	28.8%	25.0%	23.6%	22.7%		
	1.6	1.9	-1.2	-2.2		
不詳	28.9%	25.1%	21.5%	24.4%		
	2.0	2.3	-3.2	-1.0		
母の職業 第3回	無職(家事専業、失業中を含む)	26.5%	22.2%	25.0%	26.3%	***
		-0.4	-2.5	-1.3	4.1	
	学生	19.0%	28.6%	34.5%	17.9%	
		-1.6	1.3	2.0	-1.6	
	専門・技術職	22.6%	24.5%	29.6%	23.4%	
		-6.3	3.1	7.1	-3.6	
	管理職	15.7%	35.1%	29.9%	19.4%	
		-2.9	3.5	1.2	-1.6	
	事務職	26.8%	21.9%	25.8%	25.5%	
		0.3	-1.1	0.9	-0.2	
	販売職	27.4%	24.8%	23.8%	24.0%	
		0.8	2.1	-1.4	-1.5	
	サービス職	29.0%	22.4%	22.8%	25.8%	
	2.7	-0.3	-2.7	0.2		
保安職	22.0%	24.0%	32.0%	22.0%		
	-0.7	0.2	1.1	-0.6		
農林漁業職	27.5%	20.9%	24.6%	27.0%		
	0.3	-0.6	-0.2	0.5		
運輸・通信職	26.5%	24.1%	20.5%	28.9%		
	0.0	0.3	-1.0	0.7		
生産工程・労務職	33.7%	21.0%	20.7%	24.7%		
	6.1	-1.5	-4.0	-0.8		
その他	33.0%	22.3%	21.9%	22.9%		
	3.3	-0.2	-1.7	-1.4		
不詳	27.4%	29.0%	21.4%	22.2%		
	0.4	3.0	-1.7	-1.5		

※ \*はχ<sup>2</sup>乗検定の結果。\*\*\*<0.001 \*\*<0.01 \*<0.05

※ 下段は残差。残差が|1.97|を超えるものを太字とした。

表6 子ども観の4分類と回答者の属性（クロス表）（続き）

		子ども観				
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整	
父の年齢 第3回	20～24	28.9%	24.2%	23.3%	23.7%	***
		1.7	1.2	-1.5	-1.4	
	25～29	27.0%	21.7%	24.7%	26.6%	
		0.9	-1.8	-1.1	1.9	
	30～34	26.4%	21.6%	25.5%	26.5%	
		-0.7	-3.7	1.0	3.2	
	35～39	26.7%	22.8%	25.3%	25.2%	
		0.5	0.7	0.1	-1.2	
母の年齢 第3回	10代	21.1%	23.7%	34.2%	21.1%	***
		-0.8	0.2	1.3	-0.6	
	20～24	29.3%	24.7%	21.8%	24.1%	
		2.6	2.1	-3.3	-1.4	
	25～29	27.1%	21.6%	24.7%	26.6%	
		1.2	-2.7	-1.3	2.6	
	30～34	26.6%	21.9%	25.3%	26.1%	
		0.1	-2.9	0.5	2.1	
母の年齢 第3回	35～39	26.1%	23.4%	25.8%	24.7%	
		-1.4	2.2	1.7	-2.4	
	40～44	23.8%	27.1%	26.5%	22.6%	
		-3.0	5.2	1.4	-3.3	
	45～49	37.1%	26.6%	14.7%	21.7%	
		2.8	1.1	-2.9	-1.1	
	50歳以上	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	
		0.7	-0.8	-0.8	0.8	

		子ども観				
		知性× 調整	知性× 積極	感性× 積極	感性× 調整	
父の最終学歴	中学校	30.8%	22.2%	21.5%	25.4%	***
		5.3	-0.4	-4.6	-0.4	
	専修・専門学校 (中学校卒業後)	31.7%	26.7%	18.9%	22.7%	
		2.8	2.3	-3.4	-1.6	
	高校	29.7%	21.1%	22.6%	26.6%	
		11.9	-5.8	-10.0	3.5	
	専修・専門学校 (高校卒業後)	26.0%	21.6%	25.3%	27.1%	
		-0.9	-1.8	0.1	2.4	
	短大・高専	24.9%	23.1%	25.9%	26.1%	
		-1.4	0.5	0.5	0.3	
母の最終学歴	大学	22.7%	23.7%	28.5%	25.2%	
		-12.4	3.7	10.7	-1.6	
	大学院	19.0%	28.5%	34.7%	17.8%	
		-6.6	5.5	8.5	-7.0	
	その他	37.5%	29.2%	12.5%	20.8%	
		1.7	1.1	-2.0	-0.8	
	不詳	28.0%	27.2%	21.8%	23.0%	
		0.9	2.8	-2.0	-1.6	
	中学校	31.2%	23.6%	19.8%	25.4%	***
		4.3	1.1	-5.1	-0.3	
専修・専門学校 (中学校卒業後)	33.0%	24.2%	18.7%	24.0%		
	3.4	0.9	-3.5	-0.9		
高校	30.9%	21.1%	21.0%	27.0%		
	16.3	-5.9	-15.9	4.9		
専修・専門学校 (高校卒業後)	26.9%	21.3%	24.9%	26.9%		
	0.9	-2.9	-0.8	2.6		
短大・高専	22.7%	23.0%	29.0%	25.4%		
	-9.9	1.1	9.9	-0.8		
大学	18.5%	26.5%	33.0%	22.0%		
	-14.7	7.6	14.4	-6.8		
大学院	15.3%	34.9%	38.7%	11.1%		
	-3.9	4.5	4.8	-5.2		
その他	25.6%	34.9%	16.3%	23.3%		
	-0.1	1.9	-1.4	-0.4		
不詳	27.8%	30.0%	22.5%	19.8%		
	0.4	2.7	-1.0	-2.0		

※ \*は $\chi^2$ 乗検定の結果。\*\*\*<0.001 \*\*<0.01 \*<0.05

※ 下段は残差。残差が|1.97|を超えるものを太字とした。

表6 子ども観の4分類と回答者の属性（平均の差の分散分析）

子ども観		第3回時身長 (cm) ※1	第3回時体重 (kg) ※2	父母の総収入 (第3回)(万円) ※3
知性×調整	平均値	89.26	12.82	517.63
	N	11,241	10,182	10,042
知性×積極	平均値	89.39	12.87	539.95
	N	7,682	8,469	8,510
感性×積極	平均値	89.40	12.85	545.81
	N	8,939	9,779	9,628
感性×調整	平均値	89.22	12.81	524.02
	N	8,994	9,908	9,810
F値		5.044**	3.406*	6.146***

\*\*\*<0.001 \*\*<0.01 \*<0.05

※多重比較(Turkey( $\alpha$ ))によると、以下の項目が5%水準で有意

※1「知性×積極」×「感性×積極」、「感性×積極」×「感性×調整」

※2「知性×積極」×「感性×調整」

※3「知性×調整」×「知性×積極」、「知性×調整」×「感性×積極」、「感性×積極」×「感性×調整」

以上のような結果をあえて大雑把にまとめると、住まいが郡部である、祖父母との関係性が遠い、親の収入や職業威信が低いなどの層が、「知性×調整」という伝統的な規律型（広田（1999）でいう「厳格主義」タイプ）の子ども観を持ちがちであるということになる。それに対し、都市部や、階層、学歴等で上位と見られる層では、「知性×積極」と「感性×積極」が両方見られると考えられる。これは、しっかりした子どもを望む層（もしかすると学歴や業績達成を望む、広田のいう「学歴主義」タイプ）と、童心主義的な感覚的でのびのびとした子ども観を望む層（広田の「童心主義」タイプ）とに分化していることを示していよう。ただし、一番最初に見たように、子どもの性別や出生順位、成長の度合い、さらには回答者が父か母かなどにより、積極性を望むか協調性を望むかにも差異が見られ、一概に社会的属性のみから判断することもできないと言える。

#### 4.2 ロジスティック回帰分析

ついで、以上の結果を、さらに各変数間の影響を統制した形で確認するために、各ケースが4分類それぞれに当てはまるか否かを従属変数としたロジスティック回帰分析を行い、偏回帰係数の検討を行った。4.1 で検討した諸変数のうち、「父母の国籍」は日本人以外のケースが少ないため除外し、不詳回答が多い「父母の総収入」と子どもの「身長」「体重」は、予備的な分析を行って以下に見る結果と大きく関係しないことを上で除外した。残り子どもや回答者の状況と、都市規模や父母の階層や学歴に関する項目を以下のように整理し、独立変数とした。

<独立変数>

- ・子どもの性別：女子ダミー（男子を基準）
- ・回答者：回答者父のみダミー 回答者父母のみダミー 回答者その他ダミー（回答者母のみを基準）
- ・兄弟姉妹：きょうだいダミー（きょうだいがいない場合を基準）  
（注）兄姉がいる場合と弟妹がいる場合で、父母の平均年齢と前者は正の相関、後者は負の相関が強いため統合し、第1回の時点で兄姉がいる場合、または第3回で弟妹がいる場合をダミー変数とした（対象児が多胎児の場合は除く）。
- ・核家族か否か：祖父母同居ダミー（非同居を基準）
- ・都市規模：13都市ダミー 郡部ダミー 外国ダミー（その他の都市を基準）
- ・母親の職業：母主婦ダミー 母常勤ダミー（第2回調査時のデータ それ以外を基準）  
（注）母親の職業が無職、学生、パート・アルバイト、自営業・家業、内職、その他、不詳の場合をまとめ、基準変数とした
- ・父親の職業：父専門・技術職ダミー 父管理職ダミー 父販売職ダミー 父サービス職ダミー 父保安職ダミー 父農林漁業職ダミー 父運輸・通信職ダミー 父生産工程・労務職ダミー 父職その他ダミー（第3回調査時のデータ 事務職を基準）  
（注）父親がいない場合は、分析に用いるケースの減少を防ぐため「父職その他ダミー」に含めた
- ・親の学歴：父大卒以上ダミー 父学歴その他ダミー（大卒未満を基準）  
（注）父母の学歴は相関が高いため、父の場合のみを参考とした。父親がいない場合は、上記同様「父学歴その他ダミー」に含めた。
- ・父母の年齢：父母平均年齢（第3回）

表8がロジスティック回帰分析の結果である<sup>8</sup>。わかりやすくするため、有意であった独立変数の符号のみ表9に示してある。まず、確認すべきは、都市規模はいずれも有意でないということである。したがって、現代においては、都市部に居住しているか否かは、それ単独では子ども観には大きな影響を与えていないと考えられる。これは、逆に言えば、子ども観は都市規模に関わらず、ある程度均質に分布しているということである。

また、きょうだいはいるほうが「知性」志向に影響し「感性」志向に影響するという傾向が見られる。少なく産んでよりよく育てる層が童心主義的であるとも言えるようにも思われるが、子ども数に関しては、2歳半時点ではまだ今後弟妹が増加すると考えられるので、確定的なことは言えない。

<sup>8</sup> SPSS Regression15.0にて強制投入法にて行った。なお、表は割愛するが、事前に各変数の相関の検討も行ったが、相関係数が|0.3|を超えるような項目はなかった。また、他の変数と|0.1|を超える相関係数を多く持つ、学歴や年齢については、それを除いた分析も行ってみたが、結果に大きな差異が見られないため、ここでは割愛した。



表8 子ども観4分類の規定要因（ロジスティック回帰分析）

N=41,662

	知性×調整			知性×積極			感性×積極			感性×調整						
	B	有意確率	Exp (B)	B	有意確率	Exp (B)	B	有意確率	Exp (B)	B	有意確率	Exp (B)				
女子ダミー	0.158	***	0.000	1.171	-0.128	***	0.000	0.880	-0.128	***	0.000	0.880	0.082	***	0.000	1.086
回答者父のみダミー	-0.148	**	0.003	0.862	0.184	***	0.000	1.203	0.114	*	0.014	1.121	-0.161	**	0.001	0.851
回答者父母のみダミー	0.018		0.838	1.018	0.044		0.638	1.045	0.012		0.893	1.012	-0.070		0.440	0.932
回答者その他ダミー	0.476	**	0.001	1.609	0.451	**	0.003	1.570	-0.470	*	0.013	0.625	-0.720	***	0.000	0.487
きょうだいダミー	0.244	***	0.000	1.277	0.076	**	0.003	1.079	-0.242	***	0.000	0.785	-0.068	*	0.004	0.934
祖父母同居ダミー	0.058	*	0.034	1.059	-0.012		0.689	0.988	-0.058	*	0.043	0.944	0.008		0.786	1.008
13都市ダミー	-0.039		0.171	0.962	0.020		0.503	1.020	0.037		0.189	1.038	-0.018		0.534	0.982
郡部ダミー	0.021		0.479	1.021	-0.013		0.688	0.987	-0.005		0.881	0.995	-0.007		0.825	0.993
外国ダミー	-0.226		0.483	0.798	0.431		0.106	1.539	-0.061		0.827	0.941	-0.218		0.471	0.804
母主婦ダミー	0.010		0.723	1.010	-0.104	***	0.000	0.901	-0.014		0.639	0.986	0.101	***	0.001	1.106
母常勤ダミー	-0.086	*	0.025	0.917	0.117	*	0.044	1.124	-0.069		0.235	0.933	-0.175	**	0.002	0.839
父専門・技術職ダミー	0.012		0.764	1.012	0.004		0.923	1.004	0.086	*	0.027	1.090	-0.104	**	0.008	0.901
父管理職ダミー	0.037		0.497	1.038	0.007		0.901	1.007	-0.052		0.335	0.950	0.010		0.845	1.010
父販売職ダミー	0.093	*	0.043	1.098	-0.118	*	0.014	0.889	0.011		0.809	1.011	0.004		0.932	1.004
父サービス職ダミー	0.103	+	0.067	1.108	-0.100	+	0.093	0.905	-0.008		0.892	0.992	-0.006		0.910	0.994
父保安職ダミー	0.177	*	0.022	1.193	-0.028		0.732	0.972	-0.124		0.132	0.883	-0.037		0.635	0.963
父農林漁業職ダミー	-0.146		0.155	0.864	0.070		0.496	1.073	0.160		0.111	1.173	-0.073		0.470	0.930
父運輸・通信職ダミー	0.187	**	0.002	1.206	-0.049		0.439	0.952	-0.090		0.151	0.914	-0.070		0.245	0.932
父生産工程・労務職ダミー	0.137	**	0.002	1.147	-0.043		0.281	0.958	0.123	**	0.001	1.131	0.000		0.996	1.000
父職その他ダミー	0.128	*	0.023	1.137	-0.059		0.202	0.943	-0.030		0.501	0.970	-0.061		0.163	0.941
父大卒以上ダミー	-0.281	***	0.000	0.755	0.126	***	0.000	1.135	0.261	***	0.000	1.298	-0.101	***	0.000	0.904
父学歴その他ダミー	-0.009		0.923	0.991	0.204	*	0.025	1.226	-0.103		0.298	0.902	-0.100		0.298	0.905
父母平均年齢(第3回)	0.000		0.852	1.000	0.008	**	0.004	1.008	0.000		0.979	1.000	-0.008	**	0.003	0.992
定数	-1.240	***	0.000	0.289	-1.459	***	0.000	0.232	-0.992	***	0.000	0.371	-0.752	***	0.000	0.471
R2		0.009	***			0.004	***			0.008	***			0.003	***	

表9 子ども観4分類の規定要因（ロジスティック回帰分析の符号のみ）

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
女子ダミー	+	-	-	+
回答者父のみダミー	-	+	+	-
回答者父母のみダミー				
回答者その他ダミー	+	+	-	-
きょうだいダミー	+	+	-	-
祖父母同居ダミー	+		-	
13都市ダミー				
郡部ダミー				
外国ダミー				
母主婦ダミー		-		+
母常勤ダミー	-	+		-
父専門・技術職ダミー			+	-
父管理職ダミー				
父販売職ダミー	+	-		
父サービス職ダミー	+	-		
父保安職ダミー	+			
父農林漁業職ダミー				
父運輸・通信職ダミー	+			
父生産工程・労務職ダミー	+		+	
父職その他ダミー				
父大卒以上ダミー	-	+	+	-
父学歴その他ダミー		+		
父母平均年齢(第3回)		+		-

それ以外を見ると（その他などは除く）、ある程度一貫した傾向が見られる。すなわち、子どもが女子であること、祖父母と同居していること、母親が主婦であることが、「知性×調整」または「感性×調整」の調整型と正の関係性を持ち、「知性×積極」または「感性×積極」の積極型と負の関係性を持つ。回答者が父であること、母親が常勤であること、父親が大卒であることなどは、これと逆の関係性を示している。これらから、すなわち、子どもと回答者のジェンダーでは女性が調整型、祖父母との同別居に象徴される家族形態では別居という一般に旧来の形と考えられるものが調整型、母親の職業では常勤に比して主婦が調整型、親の学歴において学歴が低いほうが調整型と言える。さらに、よりこれらの傾向が強いほうが「知性×調整」と特に関連し、よりこれらと逆の傾向を持つほうが「感性×積極」と強く関連しているという傾向が、全体として見受けられる。全体的な傾向が読み取りにくい父親の職業でも、基本的には、これを裏切るものではないと思われる。

したがって、保守的、後進的と見なされてきた属性が「調整」型、特に「知性×調整」という子ども観に関係し、進歩的と見なされてきた属性が「積極」型、特に「感性×積極」という子ども観に関係していると言ってよいだろう。その点で、家族と子ども観の歴史研究が大都市の中間層という形で示したような進歩的な層ほど——都市規模は関連しなかったし、現代においては専業主婦よりも常勤の主婦のほうが進歩的なものかもしれないという差異は見られるが——より児童中心的で童心主義的な子ども観を持ち、そうでない層ほどより伝統的で厳格な子ども観を持っていると言えそうである。

以上から、コレスポネンス分析を用いて分類した出生児調査の子ども観の4分類は、先行研究ともある程度整合的であり、子ども観の変化や子ども観によるその後の家族の養育、教育戦略等の分析に適用可能と推察できる。ここから、「出生児調査」の第3回問14「どんな子に育てて欲しいか」は、2.で見たような限界はあるものの、先行研究とも整合的で、家族と子ども観の研究に対して資する分析が可能な項目であると言えるだろう。最後に、次節では、そのような分析の事例の1つとして、子ども観としつけ行動の分析を行いたい。

## 5. 子ども観の分類を用いた分析事例——しつけの仕方と子ども観——

「出生児調査」は、パネル調査であり、多くの質問を子どもの成長に沿いつつ聞いている。したがって、第3回問14「どのような子に育てて欲しいか」から抽出した子ども観の4分類を用いた分析にも多くの展開の可能性があると考えられる。本稿の末尾に、1つの分析事例として、第4回問16「平成13年1/7月生まれのお子さんが悪いことをした場合どのように対応していますか」という設問との関係性を見てみたい。

どういう子どもや大人に育てて欲しいかという社会化のゴールと、しつけや教育方針などのその手段とは、しばしば混同されるが基本的には別の事柄である。ここでは、各子ども観を持った保育者とそのしつけの方法の関係性を検討する。表10がクロス表分析の結果

である。それを見ると、基本的な回答傾向は子ども観の4分類ごとに大きくは変わらないが、たいへん興味深い結果が見てとれる。

表9 子ども観としつけの方針（クロス表）

N=4,0615					
	①言葉でいけない理由を説明する				合計
	よくする	ときどきする	まったくしない	不詳	
知性×調整	80.5%	19.1%	0.2%	0.3%	100.0%
	-4.1	4.3	-0.5	-0.9	
知性×積極	80.9%	18.2%	0.3%	0.5%	100.0%
	-2.4	1.6	3.1	3.7	
感性×積極	83.2%	16.4%	0.1%	0.3%	100.0%
	4.1	-4.0	-1.6	0.2	
感性×調整	82.6%	17.1%	0.2%	0.2%	100.0%
	2.3	-1.9	-0.9	-2.8	
合計	81.8%	17.7%	0.2%	0.3%	100.0%

N=4,0615					
	②理由を説明しないで言葉で「だめ」「いけない」としかる				合計
	よくする	ときどきする	まったくしない	不詳	
知性×調整	22.3%	64.9%	11.7%	1.1%	100.0%
	4.2	-2.2	-1.8	-0.5	
知性×積極	21.5%	64.4%	12.8%	1.4%	100.0%
	1.5	-3.2	1.9	2.5	
感性×積極	19.7%	66.3%	12.9%	1.1%	100.0%
	-3.6	1.5	2.6	-0.7	
感性×調整	20.2%	67.3%	11.5%	1.0%	100.0%
	-2.1	3.8	-2.5	-1.2	
合計	20.9%	65.8%	12.2%	1.1%	100.0%

N=4,0615					
	③おしりをたたくなどの行為をする				合計
	よくする	ときどきする	まったくしない	不詳	
知性×調整	10.8%	67.6%	20.8%	0.8%	100.0%
	4.2	2.1	-5.3	-0.3	
知性×積極	10.4%	64.6%	23.8%	1.2%	100.0%
	2.5	-5.0	3.1	3.5	
感性×積極	8.2%	66.1%	24.9%	0.7%	100.0%
	-5.9	-1.6	6.4	-2.0	
感性×調整	9.5%	68.4%	21.2%	0.8%	100.0%
	-0.8	4.3	-4.0	-1.1	
合計	9.7%	66.8%	22.6%	0.9%	100.0%

N=4,0615					
	④子どものしたことを無視して悪いことに気づかせる				合計
	よくする	ときどきする	まったくしない	不詳	
知性×調整	1.5%	33.6%	62.9%	2.0%	100.0%
	1.5	4.3	-4.7	0.7	
知性×積極	1.6%	31.2%	65.0%	2.2%	100.0%
	2.2	-1.6	0.4	2.2	
感性×積極	1.2%	31.8%	65.3%	1.7%	100.0%
	-2.0	-0.4	1.3	-1.3	
感性×調整	1.2%	31.0%	66.1%	1.7%	100.0%
	-1.6	-2.4	3.1	-1.5	
合計	1.4%	31.9%	64.8%	1.9%	100.0%

N=4,0615					
	⑤外に出す・押入れなどに閉じ込める				合計
	よくする	ときどきする	まったくしない	不詳	
知性×調整	0.6%	24.3%	73.9%	1.2%	100.0%
	0.5	5.8	-5.7	0.1	
知性×積極	0.7%	21.1%	76.6%	1.5%	100.0%
	2.2	-3.2	1.8	3.4	
感性×積極	0.4%	21.2%	77.3%	1.0%	100.0%
	-1.7	-3.2	3.9	-2.2	
感性×調整	0.5%	22.5%	76.0%	1.1%	100.0%
	-1.0	0.3	0.2	-1.3	
合計	0.6%	22.3%	75.9%	1.2%	100.0%

※上段が行%、下段が残差。各表ともX2乗検定0.1%準で有意

興味深いのは、「知性×調整」「知性×積極」の「知性」型と「感性×積極」「感性×調整」の「感性」型との間の差異である。

まず、「知性」型に注目してみる。「①言葉でいけない理由を説明する」の結果を見ると、「知性」型のほうが「感性」型と比べて、「よくする」が少なく「ときどきする」が多いのである。わずかな率であるが、「知性×積極」は「まったくしない」が全体と比較して多いことも確認できる。「よく考えて行動する子ども」、「思ったことをはっきり言う子ども」などと親近性を持つ「知性×積極」であるが、言葉をつくして説明して考えさせるというわけではないようである。その代わりに、「②理由を説明しないで言葉で『だめ』『いけない』としかる」は、「知性」型のほうが「感性」型より「よくする」を選択しやすくなっており、「知性」型は、親が言葉をつくすのではなく、いわば「だめなものだめ」と教え込むというしつけの方法をとっていることがわかる。

さらに、「③おしりをたたくなどの行為をする」、「④子どものしたことを無視して悪いことに気づかせる」といった古典的な厳格なしつけ方法（「⑤外に出す・押入れなどに閉じ込める」の「ときどきする」も）は、「知性×調整」という前節の分析によればもっとも保守的な層に多い子ども観の持ち主が選びやすくなっている。「知性×調整」は礼節などを重視する子ども観であり、その方法として、厳格なしつけが採用されていることがうかがわれる。同様の設問に対して「知性×積極」は、「よくする」の選択率が高いと同時に、「まったくしない」の選択率も高い傾向がある。すなわち、学歴や職業的に上位の層も選びやすいこの子ども観には、古典的な厳格なしつけを採用する傾向と逆に体罰や有無を言わさぬ強制を避ける進歩的なしつけを採用する傾向とが混在しているということかもしれない。

これに対して、「感性」型は、「①言葉でいけない理由を説明する」を「よくする」率が高く、それ以外の項目では「ときどきする」や「まったくしない」が多いなど、逆の傾向が見られる。すなわち、感性を重視する童心主義的な子ども観を持った保育者は、有無を言わさぬ強制ではなく、子どもの理解力を前提とした対話的なしつけ方法を選択する率が高いと考えられるのである。中でも最も進歩的な層に指示された「感性×積極」では、②～④の「まったくしない」の率が高く、この傾向を強く示していると言える。

以上から、子ども観の4類型ごとに大きく回答傾向が異なるということはないが、「知性」型、中でも「知性×調整」型は古典的で厳格なしつけを採用しやすく、「感性」型、中でも「感性×積極」型は児童中心主義的で対話的なしつけ方法を取りやすいという傾向が明らかになった。

このように、子ども観の分類は、さまざまな分析に応用できるだろう。例えば、第6回調査では、父母の子どもへの接し方や子どもの側の父母への接し方を尋ねている。これらと子ども観の関係性を分析すれば、保育者の子ども観と子どもへの接し方の関係性や、それに対する子どもの側のフィードバックなどを検討できるのではないだろうか。また、小学校入学以後の調査では、さらに教育方針等との関係を探ることもできるだろう。本稿は、その可能性を探るための基礎作業であった。